はぐくみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議

協力
丹南青少年愛護センター鯖丹支所

15号

「失われゆく社会性」

（鳥羽小学校児童）

教育相談室

子どもとしっかり向き合って

小学四年生の長女が、朝、登校前に腹痛や頭痛を訴えることが多くなりました。きびしく登校をすすめると、しぶしぶ出かけます。また、神経質で完ぺき主義のところも気になります。こんなことが続くと不登校になるのではないかと心配です。

家族は祖父母と両親、妹二人の七人ですが、父親は仕事で遅くなる日が多く、母親も働いています。どのように接していったらよいでしょうか。

●あたたかく受け止めて

きっとその訴えは、学校生活や友達関係で何かつまずいて助けを求めているサインだろうと思われます。毎日が自分の思うようにならず、いらいらし、不安をかかえて登校しているのでしょう。また、長女として、祖父母や両親から過大な期待を背負って、少し息切れ状態なのかもしれません。原因を問いつめることなく、あたたかい気持ちでゆっくりと話を聞いてあげましょう。そして、あたたかく受け止めてあげることです。

家庭は子どもが安心して過ごせる場所のはずです。悩みや不安がいやせる場所であってほしいと思います。

●悩みに共感して

学校生活は、社会生活の縮図と言われます。性格、能力、家庭環境などの異なった子ども達が集まる学級では、勉強だけでなく、友達づきあいにも気を遣いストレスのたまる毎日だと思います。お父さん、お母さんに聞いてもらいたいことで胸をいっぱいにして毎日家に帰って来るのでしょう。子どもとふれあう時間を大切にし、家庭がその悩みや不安を解消できる場所になるよう気を配ってあげましょう。

●支えあって

両親が、子どもについて話し合い、それぞれの役割を確認しあうのも大切です。お父さんも仕事が忙しいからと子育てから逃げることなく、しっかりと子どもと向かい合い、ほめるところはきちんとほめ、いけないことはいけないと自信を持って言える親になってほしいものです。

家族の一人ひとりがそれぞれ自分の役割を自覚し、お互いのよいところを認め合い、支えあっていくことが大切です。

あたたかい家庭で、自分の悩みを十分聞いてもらうことができれば、きっと明るさを取り戻し、元気に登校できるようになることでしょう。

（丹南青少年愛護センター）

家族の写真・作文大募集

青少年健全育成市民会議では、日常の生活の中で、家族や自然とのふれあいを通じて、心豊かなキラキラ輝く子ども達や青少年に関する写真、作文を募集します。募集内容については次のとおりです。

例　家族のふれあい、自然と子ども達、ほのぼの家族、我が家の子育てなど

詳しい要項、申込書については、各地区公民館または鯖江市教育委員会生涯学習課にありますので、お問い合わせ下さい。

この作品の表彰式については、告知板にも掲載しておりますが、青少年健全育成鯖江市民大会の席上で行います。

（鯖江市民会議）

告知板

●青少年健全育成鯖江市民大会

日時　平成十一年二月十三日土曜日　午後一時三十分

会場　鯖江市文化センター

内容
・記念講演、写真・作文の表彰ほか
・市民の方々の参加をお待ちしています。

居場所を子どもたちに

滴滑

人間関係を失った子どもたち

人間関係が希薄になると、集団の中で自分はどうすればいいかわからなくなる、と指摘されています。

たとえば、学校の授業。教室には三十数名の児童が座っています。そんな時、先生の方に集中できず、周りをキョロキョロと見回し落ち着いて授業を受けられない、といった態度を示すことなどです。

今、子どもの数がたいへん少なくなりました。街の中でたむろして遊ぶ光景もほとんど見かけなくなりました。

家にいても兄弟がけんかしたり、たわむれたりすることもあまりありません。仲の良い友達も、いつも成績のことばかりやかましく言われるものですから、競争相手として敵意に満ちた存在としか認識しないようになっていくでしょう。こんな環境に置かれると、自然な成り行きとして、自分一人の世界に閉じこもるようになっていきます。ビデオ、ゲーム、テレビ文化が子どもを取り込んでいるのもうなづけます。

こうした子どもたちは、やがては集団の中でどうしていいかわからない子となっていくのです。

近頃こういう子が少しづつ増えていっていると報じられています。

さて、家族はどうすればいいのでしょう。

叱らない親、叱れない親

どこかの大学生に「親が子どもを叱らない、叱れない理由はなんだと思いますか」というアンケートをとった資料があります。もちろん学生ですから、親の立場になって推測したものでしょう。

そのいくつかを紹介しましょう。

○子どもに嫌われたくないから。

○やさしい親でいたいから。

○塾や勉強でストレスがたまっている子どもに、それ以上のストレスを与えたくないから。

○叱る基準がわからないから。

○子どもの自主性を尊重したいから。

○子どもが泣くとかわいそうだから。

○学校まかせにしすぎ、家庭ですべきことを見失っているから。

○親の決めた生き方に沿って生きているから。

未だ親にならない大学生ですが、いずれの推測も当たっています。彼らが親となったとき、やはり叱らない、叱れない親になるかもしれない、と担当教授は語っています。

しかし、少し安心できる材料は、「自分は親によく叱られた」と述べている学生が、その叱られたことを非常に高く評価していることだ、と付け加えていました。

親がニコニコしたり、黄色い声で叱ったりするのは成績のことだけだったらどうなるでしょう。その子はおそらく偏った人間に成長していくだろうと思います。子どもに対して毅然たる態度を持って接する親は、そんなに少なくなったのでしょうか。

責任の所在

子どもが何か失敗をやらかしたとします。そこで親はどう考えるでしょうか。これは誰々が悪い、先生が悪い、学校が悪い、いやこんな教育を指導している文部省が悪い、こう考えていくのが今の親ではないか、と指摘した人がいます。文部省とまではいかなくても、学校までは簡単に行ってしまいそうな気がします。

どこかの町の小学校で学芸会をしました。音楽あり、劇もあり、たいへん楽しい行事です。

ところが、保護者から学校へ電話がかかり、たいへんなけんまくで「謝れ」と言ってこられたそうです。理由を聞くと、なぜうちの子を劇の配役からはずしたのか、というものであったらしく、先生も学校もたいへん困ったという話です。家庭では子どもも困ったことでしょうね。

今は、ものごとを冷静に考える力や、ひとつのできごとに対応する能力などがものすごく衰退したと言われています。ですから、ついつい誰々が悪い、何がいけないからこうなったのだ、と責任を外にばかり向けてしまおうとするのです。

こんな些細な笑ってすませることでも、顔をこわばらせて感情的になるのは、その証拠でしょう。

先述の人は、子どもの責任はすべて親が持つ、それぐらいの気概を持って欲しい、と結んでいました。

小さな幸福感

戦後、人々は衣食住を求めて懸命に暮らしていました。やがて、それが最低限確保されると、更に豊かさを求めて働きました。そして、豊かな社会が実現すると、小さな幸福感を味わうようになりました。マイホーム主義と称されたもので、自分や家族の幸福を得ることが一番大切なこと、と考えたのです。それはそれで一応大切なことではあります。

しかし、よく考えてみると、幸福感というのはもちろん、自分がそう感ずればいいという主観的なものに属しますが、他人の幸福をも願うという社会的な広がりも大切なのです。

自分だけ幸福で、人はどうなろうと関係ない、と考えたら自己中心主義とあまり区別ができないものとなってしまいます。

学校は最近、体験学習を重く考えるようになりました。そのため、いろいろな計画を立て、保護者にも参加してほしいと呼びかけています。

ところが、集団でいろいろ規制されるから嫌、自由に親子だけで、という理由からか参加しない人が増えているといいます。

規制されるのを嫌うのは現代の風潮のようですが、集団の中で味わう行動も非常に大切なことです。なぜなら、私達は多くの人々と社会生活を営んでいるからです。社会性が欠けてしまうことは、その人にとって大きな不幸となるのではないでしょうか。